

**Beatriz Penas-Ibáñez &
Akiko Manabe(eds.),
*Cultural Hybrids of
(Post) Modernism
Japanese and Western Literature,
Art and Philosophy***

Peter Lang, 2016, 234pp.

菊地利奈

Rina Kikuchi

滋賀大学 経済学部 / 准教授

本研究書は、本学部教授の真鍋晶子とスペイン・サラゴサ大学教授のBeatriz Penas-Ibáñezのふたりが編者となり、2014年にヴェニスで開催されたInternational Hemingway Society Conferenceにて発表された5本の論文と、2015年にサラゴサで開催されたInternational Japan-Research-Group Conferenceにて発表された5本の論文をもとに、10本の論文をまとめたものである。第一部の「New Cultural Standards in Japan and The West」部分にサラゴサでの国際学会での研究報告を基盤にした論文5本が、第二部の「Japanese-Anglo/American Literary Hybrids」にヴェニスで開催された国際ヘミングウェイ学会での研究報告を基盤にした論文5本がまとめられている。

本書は、東洋と西洋という異文化間の交流が文化・文学・哲学・社会に与えた影響をそれぞれに論じたものであるわけだが、異文化交流がうみだす芸術・学術的成果は、本書内に掲載された個々の論文だけではなく、本書のあり方そのものにあらわれているといえる。本書には、日本やスペインを中心に活躍する、英語を母語としないと思われる研究者たちが、ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961)というアメリカ文学を代表する作家や福沢諭吉(1835-1901)や与謝野晶子(1878-1942)を、東洋と西洋の交流と合流

という視点から考察した論文を、Peter Lang というドイツの出版社から発行したものである。なんと豊かな国際色であろうか。こういう時代が来たのか、と感慨深い。学際的で国際色豊かな、このような研究書は、グローバルな視点でグローバルに活躍する研究者たちの交流があつてこそだといえる。

また、「王道をあえていかない」という本書の特徴にも好感を覚える。本書の序文の最後には、「Zaragoza-Shiga」とサインがある。Zaragozaとはどこか。本書を読むまで、私はこの地名を知らなかった。調べたところ、スペイン東北部の都市であるらしい。そして、Shiga。『彦根論叢』を手にとっている読者に滋賀を知らぬ人はいないだろうが、Shigaは英和辞典にも英英辞典にも載っていない(となりに位置するKyotoは載っている)。英語で出版された本学術書を手取る読者はきっと、私がZaragozaを調べたように、Shigaを調べ、そこが日本の本州のまんなかあたりに位置する湖のある土地だということを知るのであろう。グローバルとは、アメリカ化を意味するものでも、世界の英語圏メトロポリスであるNew YorkやLondonを軸にするものでもない。世界の辺境かもしれないZaragozaやShigaを軸にした知的な交流なのだ、と主張するような序論である。グローバルでありながらローカルな地域の独自性を大切するこのような姿勢は、ノーベル文学賞受賞者のアイルランド

の詩人シェーマス・ヒーニー (Seamus Heaney, 1939–2013) が目指した文学的姿勢にも重なる。21世紀を生きる我々研究者に必要とされる要素であろう。

具体的に誰がどのような論文を書いているのか、以下に簡単にまとめてみる。第一部は、東洋と西洋の比較研究が軸になっており、第一本目の論文では、マドリードで教鞭をとる哲学者、Carmen Lópezが、Maurice Merleau-Ponty (1908–1961) と西田幾多郎 (1870–1945) について論じる。第二本目の論文は、Irene Stance という若手だと思われる研究者がアメリカ第一次フェミニズム運動を代表する女性作家シャーロット・ギルマン (Charlotte Perkins Gilman 1860–1935) と与謝野晶子を比較している。第三本目は共著論文で、サラゴサ大学の日本研究を専門家David Almazánとマドリードでスペイン研究をおこなうJosé Pazóのふたりが、日本とスペインを結んだ翻訳家 Gonzalo Jiménez de la Espada (1874–1938) の生涯を明らかにする。Gonzalo Jiménez de la Espadaは、フェノロサ (Ernest Fenollosa 1853–1908) が日本文化を英語圏に伝えたような役割を、スペイン語圏で果たした存在だということがわかるが、私はこの翻訳家をまったく知らなかった。この名を知らなかったばかりではない。実は、今でも、この名をどうカタカナ表記すべきなのかわかっていない。このGonzalo Jiménez de la Espadaという長い名前はどこからが苗字か、それさえも、スペイン語を解さない私には明確ではないほどだ。論文内で、Gonzalo Jiménez de la Espadaは、マドリード生まれではなくSalamanca生まれだと説明されるが、サラマンカ生まれとはなを意味するのだろう。マドリード生まれではなくサラマンカ生まれであることは、たとえば、京都生まれではなく滋賀生まれである、というような「ある

種」のエピソードを伝えるものなのかもしれない。論文を読みながら、世界を旅する、論文を通して異文化交流を体験できる、ということは喜びだ。

第四本目の論文では慶応大学でスペイン語とスペインの歴史を教えるShingo Katoが、福沢諭吉と丸山眞男(1914–1996)について論じ、第五本目の論文ではCarolina Plouが映画比較をおこなっている。Plouについての詳細は不明であるが、スペインで美術史を研究しているようである。収録された論文では、ジョン・フォード (John Ford, 1894–1973) の『Three Godfathers』(1948)と今敏 (1963–2010) の『東京ゴッドファーザーズ』(2003)を比較して論じている。

このような比較を論じた文化論・文学論に対して、比較してなにになるのか、そもそもそのような比較が成り立つのか、という疑問を持つ読者もいるかもしれない。しかし、意外な発想から意外な事実が証明されることがあるのだ、という一例をここで紹介したい。私はフェミニズム文学研究をおこなっており、上述のStanceの論文の軸をなすアメリカ作家ギルマンは私の好きな作家だ。ギルマンの書いた短編『黄色い壁紙 (The Yellow Wallpaper)』(1892)は四半世紀以上も前、私が最初に強烈な印象を受けたフェミニズム作品だ。日本のフェミニズム詩人・歌人の与謝野晶子もあきるほど読んだ。しかし、両者を比較するというとは思いついたこともなく、目次を見た時、このような比較発想は奇想天外であると感じた。というのは、両者には、ほぼ同時代に生きていたフェミニスト作家ということ以外に共通点が見いだせなかったからだ。両者は出会ったこともなく、アメリカと日本にそれぞれに生きた。互いに影響をおよぼしあったということもない。しかしである。論文を読み、両者がフェミニストとして家庭内における同じような悩みを抱えて生き、同じように社会と闘い、そして、

残念なことに人種差別的な視点を克服することができなかったという点で、フェミニストとして同じような問題点を抱えていたことに気がついた。つまり、第一次フェミニズムが抱えていた問題点の数々が、あるひとつの国や文化圏に限った問題だったのではなかったことを、本論文は明らかにしているのだ。与謝野晶子が闘ったフェミニズムは、「日本における闘い」だったのではなく、国境を超えた（男性社会における）女の闘いであったのだ。さらに、この問題を掘り下げると、第二次フェミニズムを過ぎた現在の世界各国におけるフェミニズム運動が、「女」に対する差別と闘いながら、どこの文化圏においても、他の差別、たとえば人種差別、言語圏差別、国粹主義などに陥るといった危険性があることに警笛を鳴らすものとなっている。

本書の第二部は、「ヘミングウェイ作品にみる日本」でまとまっている。はじめの二本は詩について、後半の三本は散文についての論文だ。本学部教授の真鍋は、ヘミングウェイ研究の権威である今村楯夫とともに、詩論をくりひろげている。真鍋の論文では、エズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) を通してヘミングウェイが恩恵を受けたと思われる日本の美学が指摘され興味深い。たとえば、「間」や「空」という概念を、日本で日本芸術作品から学んだフェノロサにみる、あるいは、フェノロサ・ノートを手に入れたパウンドにみる、ということまでは誰にでも想像が易い。しかし、さらにその先、パウンドから影響を受けたヘミングウェイ作品に、日本の美学の影響をみることは、これまでになかったのではないか。ヘミングウェイといえば、アメリカ文学の大家。すでにすべてが研究されつくしているのではないかとさえ思われがちだが、つい先日、ヘミングウェイの新しい原稿が見つかったという記事が新聞をにぎわしたばかりでもある (2017年9月29日, *New York Times*, [https://](https://www.nytimes.com/2017/09/29/books/hemingway-first-story-found-in-florida.html)

www.nytimes.com/2017/09/29/books/hemingway-first-story-found-in-florida.html)。

新しい視点に立てば新たな論が展開できること、新しい読み方、新しい発見があることを、比較研究は教えてくれる。グローバル化がすすみ、これまで以上に異文化間交流が盛んになった。多言語文化社会に生きるわたしたちにとって、本書が示す、国際的な交流から生まれる新しい比較研究的視点を持つことは、ますます重要になっている。

